

4福音書のうちヨハネ伝の「諸々の人を照らす眞の光ありて世に来れり」はマタイとルカ伝のダイナミックなクリスマス物語に代わる最小のイエス伝の書き出しと言われる文書だ。

この地に永住して以来私はほぼ一年を過ごしたが、最初の大きな経験は、雨か曇りの漆黒の夜の闇とは反対に月や星が冴え渡る夜には強烈にそれらを一変させる光に力があることだった。

眞に足元見えぬ暗さを知る者でなければ、月影さえ見えるその光の輝きの意味の重さは解せぬのだ。

ここでは創世記の冒頭「神光あれと言ひ給ひければ、光あり」(1:3)を大いに引き受けているが、其処には混とんと暗闇に神の言葉が先ずあり、然して光の存在を伝えている。

ヨハネ伝はその意味を継承し光をイエス・キリストの福音の言葉として展開させ、世にあって命を宿し世を形成したと力強く宣言した。これに対して同書1:5にも10にも異口同音に暗闇を負うたこの世は、光である神の言葉を認めなかったと重ねる。

一体福音書は何を読者に語らんとしたのか。神の言葉の福音は本来全ての人に語りかけ、広く受け入れることを目的としたが故に、神は人への教育、訓練、鍛錬を欲する強い意欲的な力を有していた筈だ。この福音を拒否し承認しない世とは何なのか。世の人の心が基本的に底知れぬ暗さを内包してのことだ。

「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています」(ロマ7:24)と言った伝道者パウロも一方で神に仕え、一方で神を否定せざるを得ぬ自らの現実の実態を示す。

山に永住し悠々自適に入ったわたしに良きことはこれまで読むことのできなかつたものが読めることだった。その一つに「源氏物語」(与謝野晶子訳)がある。読後感を誰かに聞かれたわけではないが、一言で言えば、「人は皆死を帯びた存在、それを恐れる不安を解決するために信心が要る」であった。

人の心に常に巣くい、こびり付いているものは死への不安、他者への疑惑と不信、見下す心、差別と更に己が心の傲慢、昂ぶり、よそ者へのヘイト=憎しみは昔も今も、世界の何処にても。

その年の秋をもって53年に亘る現役牧師を隠退し、母教会である長野の小教会に報告と挨拶がてら説教に行った。そこで分かったことは、戦後子どもらを育てた牧師も先輩信徒も最早全て天に召されていた。

かの方々の人生はどうであったか。その教会から祈りをもって送り出された自分の神学生と牧師の人生は、万博キリスト教館論議、大学闘争、教団・教区・教会紛争と、蔓延したキリスト教会全体に触んだ不信の連鎖に他人事とは思えず巻き込まれるままの自分がいた。なんとキリスト教会の紛争は長く尾を引くことか。

しかし、かの光は詩139篇1-12の示す力と化した教会の兄弟姉妹の交わりが、絶望した者の前から上から後ろから復活のキリストの御言即ち天の御使いとなって励まし、教え、忍耐させ望みを与えた。それ故教会には兄弟姉妹の交わりは必要である。信徒の交わりは聖霊の助けによって復活の主の言葉と化す。

隠退牧師となった年の暮れ、スウェーデン・ストックホルムでノーベル財団は平和賞を核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)に与えた。その働きの中心的役目を果たし、カナダ在住の被爆者サーロ節子は授賞式席上異例で強烈な言葉を世界に発進した(以下朗読)。

詩篇「我らが年を経る日は七十歳に過ぎず、健やかにして八十歳に至らん。願わくは我らに己が目を数えることを教えて、知恵の心を得しめ給え」(詩90)の熱い祈りが聞こえて来る。